

---

# 死から始まるニューデイズ

黒乃真白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死から始まるニューデイズ

### 【Nコード】

N7124M

### 【作者名】

黒乃真白

### 【あらすじ】

死んで神に出会ってチート能力貰って転生。そんな巷に溢れた設定の異世界転生冒険ダンジョン探索モノ、になる予定。テンプレだっていいじゃない、だって好きなんだもの。

本作は作者の思い付きで構成されていきます。不定期更新です。また、本作には作者が解釈した『厨二病』が存在します。その他の描写に関しても不特定多数の方へ不快感を与える可能性があるの  
でお読みになる際はご注意ください。

更に、本作には様々な既存商業作品の能力又は技等が度々登場します。そういった設定に吐き気やサブイボが発生する方がお読みになる場合は十分にご注意の上、あくまで自己責任でお願いいたします。

主人公（笑）「どんな敵が相手でも最強の俺にかかれば瞬殺だぜ。ハーレムだって余裕余裕、俺は超絶美形で無敵だからな！ 端役は精々俺を引き立ててくれよ、フッフ（暗黒微笑）」

第一話 その男、危険につき（厨二的な意味で）（前書き）

なろう初投稿がこんなんで大丈夫だろうか、色々。

とりあえず執筆途中に目眩と頭痛がしてきたので皆さんもご注意ください。

## 第一話 その男、危険につき(厨二的な意味で)

青空の下、ジークロードニアーウッドは地面に向けて力強く鋏を振り下ろしていた。

そこそこ見栄えのする顔立ちに、細くも太くも見えないが確りと鍛えられた体躯を持つ彼は、ある程度は普通の青年である。

身長はこの世界の平均よりやや上の180cm強だが、その容姿は田舎ならそこそこに目立つものの都会では特出する程でもないレベルだ。畑仕事に精を出している姿を見ても、女性受けしやすい優男風の雰囲気からは程遠く、精悍と言ったほうが彼にはまだ相応しいだろう。

腕っ節が強く体力自慢で、優しさや度胸を併せ持ち、手先も器用で学があり、適度に自堕落な彼はこの田舎町『グラツェール』に限れば老若男女を問わず、とても頼りにされている存在だった。

ただ二点。少々風変わりな所を除けば、多くはいないまでも探せば何処にでもいる普通の男と言えるだろう。

「おいジロー、そろそろ休憩にしようぜ」

「おう！　すぐ行くから先行っててくれ」

一つ目の変わった所は、自分の事をジローと呼ばせたがること。ジークでもロードでもジードでもなく“ジロー”である。

誰もが最初、疑問に思うものの人柄が良いのですぐに気にならな

くなってしまうのだが。

「ふう……俺も休憩入れるか」

最後に鍬を一振りしてからジローは大きく息を吐いた。多少の汗は掻いているが、疲れはほとんど窺えない。

燦々と輝く太陽の下で五時間ほど休み無く畑を耕していたのだが、いくら鍛えているといえどもこのスタミナは流石に異常だろう。

もっとも、少し常識外れな能力がある程度ではあまり気にされたりはしない。この世界では珍しいだけで有り得ないわけではないからだ。

鍬を肩に担いで後方にある小屋へと歩を進めながら、ジローは雲の少ない晴れた空を見上げる。

空の青を映すそのダークブラウンの瞳に特別な色はなく、ただ少しばかりの懐古と諦観だけがチラチラと覗いていた。

「ここに生まれて二十年、鍬を持ったのは十年前か……俺も随分馴染んだなあ」

独り言ちて、薄黒い煤色の髪を無造作にかきあげると太陽の光に目を細める。

その様子はまるで光の向こうに別のものを見出そうとしているかのようだ。

二つ目の変わった所は、誰にも話していないためジロー自身しか知る者はいない。

それは、話しても信じてもらえないどころか頭を疑われてしまう可能性が高く、話したところどころでどうにかなる問題でもなかったためだ。

町の人気者ジローが周囲の人と最も変わっている点、それは

「日本はいまどうなってんだろう……みんな元気だといいけど」

彼が異世界からの転生者であるという、荒唐無稽な事実だった。

思い起こされるのは、ジローがまだジークロードではなく滋郎と名乗っていた最期の時。

死んで魂が肉体から離れたあとの事。

本名：近木 滋郎 出身：太陽系第三惑星地球、日本

享年：18歳 死因：交通事故・二次災害

備考：ガソリンスタンドに突っ込んだ乗用車がガソリンスタンド諸共に爆発炎上。

その余波から通りすがりの母子を庇い、突き刺さる破片や瓦礫の弾丸を

受けきって立ち尽くしたままに大往生。

「なるほど、随分と良い死に方をしたものだな」

なにやら偉そうな態度で書類を読んでいたその人物は、そう言う  
と高い目線から滋郎を見下ろした。

現在の場所は不明。なにやらだだっ広くて目が痛くなるほど白一  
色しか存在しないという以外の情報はなく、滋郎は気がついた時に  
は此処にいた。

滋郎の前には高い位置にある仰々しい椅子に座った壮年の男性が  
いるが、彼に積極的に話しかけようとは思わない。

本能とでもいうナニカが警告している。コイツはヤバイから逆ら  
うな、と。

「ふむ……状況は分からないまでも愚者ではないか。良いだろう、  
簡潔に説明してやる」

偉そうな男性は滋郎の態度を見て抑揚に頷くと、三つの事柄を伝  
えた。

- 1、男性は人間に神と呼ばれる役職に就いているため、本当に偉い
- 2、お前はもう死んでいる

- 3、神様の定めた運命を捻じ曲げたので特別に褒美をくれてやろう  
以上だ。

分かりやすいが、それだけに理解に苦しむ要素ばかりである。

真つ当な神経をしているならまず信じないが、真つ当な神経をし  
ている者なら【役職：神】の放つ威圧感などから察して余計な口は  
挟まず素直に信じるといふ選択を選ぶだろう。

滋郎は真つ当な神経の持ち主だったので、ただ無言で話を聞いていた。もちろん聞き流すような愚は冒さず出来るだけ理解しようとは試みているが。

とりあえず分かっているのは、滋郎は既に死んでいてもこの世にいないことと、なにやら特典を貰えるらしいということだ。

「困惑はしているが、平常心を忘れず己を見失わない胆力。自身に出来ることと出来ないことを的確に見分け実行する観察力と判断力。そして常識を基盤としながらそれに囚われ過ぎず柔軟に事態へ相対する順応力。とてもただの一般人だったとは思えんな……だが、だからこそ人間は面白いのだろう」

愉快気にくつくつと笑う神。

滋郎としては、どうやら褒められているようなので悪い気はしてないのだが、それを喜ぶような状況でもないため戸惑うしかない。ややあつて、笑いを治めた神は何処からともなく六面体のダイスを三つ取り出して滋郎へと投げ渡した。

慌ててキャッチしようとするが、そのダイスは滋郎の前までふわふわわりと浮かんでいき、差し出した手の中へと勝手に落ちてしまふ。

まるで手品のようだが、それについて触れる意味はない。相手は神なのだからこのくらいで騒ぎ立ててはいけないと判断したのだ。

それよりも、と手の中にあるダイスに目をやる。

ダイスそのものは何の変哲も無い、赤白黒と色分けされている以外はただのダイスだ。何か仕掛けがしてあるのかもしれないが、振らなければならぬことは確かだろう。

特に台らしきものもないので、滋郎は床にそのまま全てのダイスを放り投げた。

乾いた音を鳴らしてダイスが転がる。

「汝への褒美は、次の命へと生まれ変わるに際してランダムで特殊な力を与えてやろうというものだ。ヒトの持つ“運”というモノは我のような神でも見通すことが出来ない不安定なもの……それ故、時には確定した事項すら覆ってしまうことがある。汝は今回、それをやってのけた。」

死の定めは何よりも強固で変えがたい。本来ならば、汝は動かなければ死ななかった。だが、汝は己の命でもって死ぬはずだった母子……正確には母親だけだったのだが、その命を助け、さらには悲嘆にくれ悲劇を歩むはずだった子供の未来さえ間接的に守ってみせた。それは評価すべきことだろう。」

ダイスを投げるタイミングで口を開いた神の言葉が終わるのと同じ時にダイスが動きを止めた。

目は、赤6 白1 黒4 となっている。

果たしてこの数字がいったいどのような結果に繋がるのか。褒美というくらいだから悪いモノはないだろうが、それでも隠しきれない緊張を滋郎は感じていた。

出た目を確認した神は、またしても何処からかボードを取り出し、その内容を読み上げる。

「赤の6、記憶の継承。白の1、魔法文明の存在する世界への転生。黒の4、強化外骨格の自由着脱。」

ほう、悪くないな。新たな人生を歩むにあたって破格の条件と云っていい」

破格の条件、と言われても滋郎にはいまいちピンとこない。赤白黒の色で何を分けていたのかも分からないが、強化外骨格とはなんなのか。

他二つは分かりやすくてよかったが……字面通りに受け取るなら

パワードスーツみたいなモノである可能性が一番高いだろう。

「そう頭を捻るな。難しいことなど何も無いぞ？ 強化外骨格は我々の世界で作られた兵器でな、その身に装着することによって扱うことができる。ただ、些か趣味に走りすぎたらしく誰も使わずに倉庫の肥しになっていなのだ。まあ性能は我が太鼓判を押しやるから安心するがいい」

どうやらパワードスーツみたいなものでいいらしい。だが、何故わざわざダイスを振らせたりするのか。直接聞いた方が早いはずだ。滋郎は別に最強の力とか厨二的なモノは望んでいないので、理不尽な願いをするつもりなどなかった。最も、文字通り賽は投げられているので文句を言うようなことはしないが。

ほとほと使い道に困る能力を貰ったものである。

「汝の考えていることは分かるぞ。確かに賽の目で決めるのは合理的でないかもしれんが、これにも事情があるのだ。定まった運命をすら変えうる者であるなら、この機会もやはり“運”でもって乗り切るべきだろう。それが幸運か不運かは関係なく、な。

赤は現在から継承するものを、白は魂の行き先を、黒は付与能力を、それぞれ決定する。選ばれる六つは常に変動しているため次に同じ数字を出した者がいたとしても、そ奴は別の力を取得する。あの意味もつとも公平な処置だろう」

確かに神が言うことも理解できる。そういうことならば納得するしかないし、何より逆らうことにメリットなど無い。

使い所の限られる強化外骨格のことは置いておくとしても、記憶の継承はありがたいものである。一説によれば転生するとき前世の記憶は消されてしまうらしいが、それは即ち自分が消えるということだ。死んでしまったのだから仕方がないことなのだろうが、消

えないですむならそれに越したことはない。

魔法云々というのは考えるだけ無駄だと判断したため、詳しいことは生まれ変わってから調べることにして滋郎は神に意識を向けなおす。

「さて、これから転生させるわけだが聞きたいことはあるか？ 汝は偶に来る愚者どもや我が部下と違い手がかからなかったからな。我も忙しい身ではあるが特別に質問を許可しよう」

余計な手間をかけさせなかった滋郎を気に入ったのか、神は少し機嫌が良さそうだ。

しかし、特に聞きたいことを滋郎は思いつかなかった。転生先の世界のことはどの道、生まれ変わってから知ることになるのだから今すぐ必要というわけではない。今の意識のまま赤ん坊から始めることに若干の不安は感じるが、記憶を消すかの二択なら前者の方がマシと滋郎は考えている。

数秒悩み、とりあえずはあまり必要とは思えないが気にはなる強化外骨格について尋ねることにした。

「ではお聞きしますが、強化外骨格を使用する場合はどうすればいいんですか？ また、使用に関して注意すべき点がありますか？」

自然と言葉遣いが丁寧になる。それが神の威圧感によるものなのか、相手が初対面で目上だからかは分からない。

滋郎の態度から卑屈な感じは見受けられないため、本当に自然となのだろう。

「強化外骨格の使い方は生まれ変われば自然と分かるようになるが、起動は簡単だ。キーワードを設定するだけでよい。そうすれば自動的に装着される。」

注意する点は特にならう。精々、強くなつた力に翻弄されないようにするくらいか。おお、そういえば言い忘れていたが、転生には神通力を用いるためその影響で肉体が外見より強く育つ。汝が考えるよりも大きな力となるだろうから注意せよ」

「なるほど……ありがとうございます。もう大丈夫です」

特定のキーワードを言って自動的に装着されるパワードスーツというものに何となく思い当たりながら滋郎は一礼する。

神通力の影響については転生後にも考えるところとして、真つ先に思い浮かぶのはバイクに跨る変身ヒーローだ。他にも戦隊モノやRPGの主人公だったり色々あるが、それらと似たようなものなのだろうか。

滋郎も小さい頃には憧れたものだが、よもやその能力を実際に手に入れる事になるとは思つてもみなかった。

とりあえず考えるのはカツコイといいな、くらいのものである。男の子はみんなそんなものだろう。

「うむ、ではその門をくぐるがいい。あまり我の仕事を増やすでないぞ」

「はい。神様もお達者で」

別れの挨拶をすると、滋郎は神が指差した先に現れた光輝く門を躊躇うことなく通過した。

そして気づけば既に二歳を過ぎていた。

臆気ながらも母から生まれた後のことを思い返せることから、どういう理屈か知らないが元々の意識がハッキリするのに二年ほど時間を要したのだろう。

何も出来ない赤子からスタートして直接恥ずかしい目に遭わずにすんだのは滋郎にとって幸運だったのかもしれない。言葉も何となくは分かったので学ぶんにも問題はなかった。

それからおよそ十八年の月日が流れ、今ではれっきとしたこの世界の住人である。たまに思い返すことはあるものの、郷愁などあまり感じていない。

今の滋郎……いや、ジークロードにとっての故郷はこの世界のこの町、グラツェールだからだ。

転生してから過ごしてきた二十年の間に、ジローは両親を失うという悲しい思いもしたが、それでも元気に今を生きている。

この世界にはまだ名前がついていないため『この世界』としか呼べないが、この世界には滋郎にとっては架空のモノだった魔法が当たり前のように存在し、同じように架空のモノであったはずの魔物まで存在する。

五年ほど前、ジローの両親は魔物の被害に遭って亡くなってしまった。

グラツェールから近隣の都市へ農作物を卸に行く途中、本来そこにいるはずのない強大な魔物が突然出現し、ジローの一家を襲ったのだ。

強いとはいっても、一体だけなら素のジローでもすぐに退治できただろう。その当時のジローは身体能力だけなら一流の戦士に匹敵していた。

だが、その魔物は十匹以上の大群で奇襲を仕掛けてきたため対応が間に合わず、ジローは両親を目の前で殺されてしまった。

もっと早く魔物の存在に気づいていればまた違ったかも知れないが、その魔物たちは影と一体化することが出来る珍しい種類で、街道にある大きな立て看板の影に潜んでいた。たとえ能力があるうと一般人のジローに気づけるはずがない。

魔物の名は【シャドウ】といい、ごく一部の地域にしか生息せず、田舎町の付近どころかそもそもグラツェールのある大陸には存在しないはずだった。

それに襲われて両親を殺されたとき、ジローは初めて強化外骨格を使った。設定だけはしていたものの、今まで必要に迫られる状況に陥ったことがなかったため、記憶の隅に追いやっていた能力だ。

その力は圧倒的で、十以上いたシャドウを容易く捻り潰した。

最初から使っていればと思ったが、最初の奇襲で御者席にいた両親を狙われていたのでシャドウに気づけなければ結局は同じことだっただろう。

全てを叩き潰した後、変身は勝手に解けていた。実際は任意で着脱できるのだが、その時の精神状態が不安定だったために自動で解除されたのだと思われる。

次の日に国の軍隊がやってくるまで、ジローは冷たくなった両親の前でただ呆然と立ち尽くしていた。

後日聞いた話では、ジローの一家を襲ったのは国の軍がわざわざ海を渡って捕獲してきたモノが輸送中に逃げてしまったものだったのだという。

部隊を率いていた隊長に謝罪されたが、ずっと悲嘆にくれていたジローはその事をあまり覚えていない。生返事しか返していないこ

とは想像がつくが。

それでも数日後にはどうにか立ち直り、今では両親の残した畑を耕して生活している。

これからもこうして農作物を育てては近隣の都市に卸しに行くという、変わり映えのない平穏な日々を過ごしていくのだろう。

漠然とだが、ジローはそう思っていた。そして、そんな日常が掛け替えのないものであることもまた理解し、些細な幸せを感じるのだ。

もつとも。

そういった何でもない幸せほど、理不尽に奪われるのだということも知っているのだが。

例えばそう

「ん？ なんだ？」

休憩のために小屋へと戻る途中、ジローは膨大な力の流れ……この世界風に言えば魔力か、それを感じて思わず振り返った。同時に傍の森から桃色の極光が閃き、つい先程まで耕されていた畑に突き刺さると轟音と共に全てを吹き飛ばした。

土埃が盛大に舞い、滅茶苦茶になった畑を覆い隠す。だが、目の前でその光景を見ていたジローには確認できなくなった畑がどんな惨状を呈しているのか容易く想像がついた。少なくとも、もう此処を耕す必要はないだろう。畑として使うことも出来ないが。

「……………うわあい」

このように、まったく唐突に災厄は降りかかる。

「おいつ、ジロー無事か……ってなんだこりゃあ!？」

しばらく呆然としてしていると、のっぴきならない音を聞きつけたのが先に休憩にいていた男が慌てた様子で駆けてきた。ジローのことを心配していたようだが、畑の惨状を目の当たりにしてその気持ちには大きすぎる驚愕に取って代わられる。

目も当てられないくらい酷い状態ではあるが、不幸中の幸いかまるで狙ったかのように被害を受けているのはジローの畑だけで、すぐ隣にあった彼の畑は奇跡的に全くの無傷であった。もし狙っていたのなら、先ほどの魔法らしきものの使い手は相当の腕利きなのだろう。

近くで騒ぐ男に一瞥もくれないことなく、ジローはポケットと突っ立つたまま動かない。

土埃はすでに晴れ、畑と呼べなくなった畑跡の姿を惜しげもなく太陽の下に曝している。中央にドデカいクレーターができて其処彼処が抉れ飛んでいるそれは、どう見ても無残としか形容できない。もう畑であったことすら分らないほどだ。

町で一番規模の大きい畑が、柵も苗も種も作物も一緒に一瞬にして消し飛ばされたのだからその威力は押して知るべし。むしろ自身が巻き込まれずに無傷ですんでラッキー、とジローが考え始めたところで極光が伸びてきた森から二人の人間が姿を現した。

「うひゃー、派手に吹っ飛んでんなあ。誰も巻き込まれてねえよな、コレ?」

「……………」

出てきたのは男と女が一人ずつ、どちらもまだ少年少女と呼べる年代だ。

少年の方はあからさまに軽い感じがするが、少女はむっつりと黙り込んで忙しく周囲に目を走らせている。恐らくは何かを警戒しているのだろうが、ジローたちに気がついていないようなのであまり意味はなさそうである。

しかし、それよりも気にするべきはその出で立ちだろう。見目の整った黒髪黒目の少女は、珍しい服を着ている以外にはそこまで特出すべき点はないが、少年の方は明らかに異質だった。

作り物めいた美貌と背中までかかる銀髪に肌はアルビノ、瞳は金と紅のオッドアイ。黒いロングコートを着て、腰には細く反りのある剣。刀をコートの上から巻いたベルトを利用して佩いている。

そのあまりにも痛々しい、誰かの黒歴史を刺激しそうな姿を視界に収め、空の彼方に昇天していたジローの精神もやっとな肉体への帰還を果たす。

少年たちもようやくジローたちの存在に気がついたようで、足早に近づいてきた。

「よお、ちよつと聞きたいんだけどさ……日本って国、聞いたことがあるか？」

「はあ？ いや、そんな国は聞いたこともねえけど」

寄ってくるなり挨拶もなしに馴れ馴れしく話しかけてくる少年に戸惑いながら、男が答える。すると、少年は矢継ぎ早にいくつかの質問を投げかけてきた。

「やれ、ならこの国の名前は？ だの、魔法つてあるのか？ だの、魔王はいるのか？ だのといったものだったが、男は律儀に全ての

質問に答えてやっていた。普通なら怪しすぎて近寄りたくもないだろうが、容姿にそぐわぬ態度に対応を決めかねているのだろう。

男が少年と問答を繰り返している間、ジローも少女も無言だったが、少年から目を逸らして焔跡をジッと見つめるジローの姿に少女は何らかの事情を察したらしく、少し気まずげだ。クレーター付近に焔の残骸がとっ散らかっているのを確認したからかも知れないが。

もつとも、ジローは焔が消し飛んだこと自体はそれほど深刻に思っていない。流石に何年もの苦労を積み重ねてきたモノが一瞬にして崩れ去ったことに何も感じないわけではないが、今はそれ以上に厄介事を避ける方法を模索することの方が大事だった。

とは言っても、実際には発言せずにこのまま放置しているだけで関わらずに済みそうだとは思っている。なのでそれを実行して呆けたふりをしながら黙っていると、そう時間もかからずに少年の質問攻めは終了した。訊ねられていた男は最初の困惑が嘘のように呆れ顔で少年を見ている。危険はないが、よっぽどの常識知らずだと解釈したのだろう、確かに間違っではない。

「なるほどなあ……魔法ありの異世界で、モンスターはいるけど魔王はなし。冒険者がいて迷宮があるってことはダンジョン攻略モノか？ 勇者になるのは無理っぽいけど、こういうのも面白そうじゃないん」

「……何を言ってるのかわからんが、結局お前さんは誰なんだよ」

「俺か？ 俺は佐……セフィロス・ヴィ・スプリングフィールド。ただの旅人さ」

一瞬言いよんだかと思えば、ニヒルな笑みを浮かべて少年、いやさセフィロスはそう言った。

容姿のお陰か何なのか男はさして言及することもなく「そうか」の一言だけで終わらせてしまうが、聞く人が聞けばもっと違う、例えるなら世紀末な反応を示すことだろう。

( …… アイタタタタッ )

このジローと少女のような感じで。

ジローは表情にこそ出さなかったが一步離れ、少女にいたってはドン引きしている。

当のセフィロスは自分に浸っているようで気づいていないが、少女はさり気なく移動するとジローの背後……セフィロスに対して完全な死角に立った。この世界基準で見れば小柄な部類に入る少女は、そこそこ体格のいいジローの後ろに立つと正面からはほぼ全体が隠れてしまう。

ジローには一緒に行動していたように見えたが、今の少女からは彼への忌避感と嫌悪感が漂っていて、とても二人が仲間だとは思えなかった。

「そんじゃ俺たちはもう行くわ。情報サンキュー……って、涼子ちゃんはどこいった？」

歩き出そうとしたセフィロスは、この時になってようやく先程まで傍に居た少女の姿が見えないことに気付き首を巡らせるが、少女はその度に微妙に立ち位置を変えてセフィロスの視界に入るまいとする。

その様子は男からは丸見えだったのだが、少女のあまりの必死さを不憫に思ったのが自分からセフィロスに話しかけた。

「一緒にいた嬢ちゃんなら、話してる間にどっかいつちまったぞ」

「え、マジで？」

真実ではないが、嘘でもない。確かに少女はセフィロスが男と話している間に移動していたので、どこかに行ったといえれば行っている。男はその行き先を知っているが、直接問いかけられたわけでもないし、それを教えなくとも嘘にはならないだろう。

セフィロスも、少し先に見える町に一足早く向かったのだろうと勝手に思い込んだようだ。そうして自身も町へ向かおうとしたとき、ようやくジローの様子に気がついた。

「なあ、コイツはなんでこんなところでボーっとしてんだ？」

「あー……ついさっきな、そいつの畑が粉微塵にぶつとばされたみたいだよ」

「え。そ、そいつは災難だったな……んじゃ俺は急ぐんで！」

男は一目で怪しいと分かるセフィロスに対して疑いの眼差しを向けながら答えるが、セフィロスはセフィロスで心当たりでもあるのか分かり易くうろたえ、逃げるようにして町へと走っていった。その速度は尋常ではなく、正に瞬きの間にセフィロスの姿は見えなくなった。この畑から町までは然程離れていないので、突然の突風に驚いている町の様子も把握できる。

「それで、嬢ちゃんはいいのかい？ ツレは行っちゃったぞ」

「止めて下さい、わたしはあんな痛々しい奴の仲間じゃありません。たまたま一緒に居ただけの無関係な赤の他人です」

「そ、そうか？」

セフィロスが去ってしばし唾然としていた男が我に返って少女に問いかけるが、心底から不快であると全身でアピールしながら少女は全力で“ツレ”の部分を否定する。声音からは真剣さが感じられるため、照れ隠しとかでなく本心なのだろう。

この男には理解できないことだが、ジローには少女の心が痛いほどによく解る。例えこの世界ではアレの正体が分からないのだとしても、あんなのお仲間だとは死んでも思われたくない。

「しかし、ここまで滅茶苦茶なのにうちの畑には被害なしとは。ジローは災難だったなあ」

「ああ、そうだな」

これからの生活を考えると痛くなってくる頭を抑えて、ジローは深いため息を吐く。親の形見に等しい畑が潰れたこと以上に、先の見通しが立たないことが問題だった。

前にも言ったように畑がなくなっただけで自体はジローにとってそう深刻なわけではない。生活するだけなら出稼ぎに出るなりすればいいし、困った時に頼れる人間が村にも何人かいる。最悪、腕っ節には自信があるので王都の方について兵士として取り立ててもらおうという手段もあった。

冒険者になるという選択肢もなくはないが、安定に欠けるし何より危険だ。その度合いは王都の下っ端兵士など目ではない。統計では年間で数百人以上の死者が出ており、迷宮での行方不明者を含めると軽く千を超える。

この【迷宮】というのは、この世界にかつて存在した超古代文明の遺産ともいわれている不思議な場所だ。

世界中に数えられる程度が点在する迷宮の内部は、文字通り迷路のように入り組んでいることもあり探索は困難を極め、さらには魔物も生息している。倒しても倒してもどこからともなく現れる魔物は掃討することもできず、さりとて迷宮からは出てこないため、国は監視と警備に留めざるをえなかった。

けれど迷宮の中には外の世界では見られない新種の魔物をはじめ、貴重な植物や鉱石が散見でき、稀に特殊な力を持った道具も見つかることがあったことから、富を求めた者や好事家に依頼を受けた者たちが潜ることは多くある。中には純粹に迷宮への興味から挑む者や、ただ強い魔物と戦いたいだけの酔狂な者もいたりするが、どうあるにしてもその殆どが冒険者であることが一番の特徴かもしれない。

それというのも、元々未開の地を進んでいくような事態を想定されていない国の軍隊などでは迷宮の探索が思うように捗らず、博打要素の大きい迷宮に割ける資金も中々用意できないという懷事情や、広がったり狭かったりする迷宮内で数十人単位で動くのが当たり前前の軍隊は上手いこと連携がとれず、軍規や細かい命令系統が邪魔をして生存率を下げてしまったりと、とにかく国軍は迷宮探索にはトコトン不向きだったからだ。

対して冒険者たちは元々が未開の地を好んで踏破しようとする者達であり、多くとも一組五人以下の人数で連携を成し、最低限のルールさえ守れば余計なしがらみに縛られることもない。ついでに言えば、依頼や命令より自分と仲間の命を優先するためその生存率は軍隊の比ではなかった。

そのため、今では国も積極的に冒険者に依頼を出す。なにせ軍隊を動かすよりも安上がりだし、迷宮は危険な代わりに其処にある資源が枯渴することがない、まさに宝の山のようなところだからだ。それに迷宮が発見された当時はともかく、現在の国々にとって迷宮

は生命線の一つと言っても過言ではない。

ともかく。両親が生きていた頃に憧れていた冒険者という生き方は、それなりの苦勞と平穩に暮らせる幸せを知った今となっては遠くから眺められれば十分なものでしかなかった。

当面は近隣の都市にでも出稼ぎにいつて生計を立てようかと思案している、なにやら視線を感じてジローはそちらを見やる。そこにはまだ少女がおり、何かを言いたそうにジローを見つめていた。

「何か？」

「あの、えっと……そう、名前。あなたの名前を教えてくださいませんか？ あ、わたしは井上 涼子っていうです」

訊ねてみると、少し慌てた調子で少女は言葉を返す。さきの反応を見る限り、セフィロス（笑）とは違い彼女の名前は本名だろう。

久しぶりに見た、恐らくは同郷の人間が皆一様に“ああ”では心情的に辛い。ジローにとって不幸だったのは、セフィロスが名乗った名前の元ネタが全て理解できてしまったことであろうか。もしセフィロスが自分と同年代だと考えると、空恐ろしいものがジローの背筋を駆け巡る。

死んでからを合わせると、とつくに三十路を過ぎて四十路に手が届くところまできているのだ。アレが生前からあの見た目なわけがないので、容姿から元の年齢を判断することはできない。仮に彼も中身は三十代だとすると、そこまで考えて、ジローは思考を放棄した。

「俺はジークロード・ニアウッド。ジローと呼んでくれるとありがたい」

「ジロー、さん？　じろうさん、ですか？」

「っ……ああ、そっだ」

問い直された言葉に、内心を表に出しそうになるほど動揺する。

この世界に生まれ、愛称として生前呼ばれ慣れた名前を広めてから初めてキチンとした発音で呼ばれたことが、動揺するほどに嬉しいと、感じてしまった。

ジローがどうにか顔に出そうな喜色を押さえ込んでいると、涼子に名前を聞かれなかったために落ち込んでいた男が、別のことを考えようとしたのかふと呟いた。

「嬢ちゃんはイノウ・エ・リョーコっつてのわ。さっきのセフィロスとかいう坊主もそっだが、貴族や王族以外でミドルネーム持ちはあ珍しいな。もしかしてやんごとないお家柄ってヤツなのかい？」

「井上　涼子です。ここ風にいうと、涼子・井上かな？　とにかく、わたしはただの女子高生だし、ミドルネームなんて持ってませんから」

「おお、そっなのわ？　リョーコ・イノウエ、ね。あ、ちなみに俺の名前は」

「そんなことより。わたし、じろうさんに色々聞きたいことがあるんですっ」

ずい、と涼子はジローに大きく一歩近づき、勢いに押されてジローは半歩下がる。男は肩を落しながら来た道に戻っていった。休憩に入ってから結構な時間が経過しているので、きつと畑仕事に戻

るのだらう。

畑を潰されたジローには戻る仕事もないので、晩までの時間は空いている。簡単に引き下がりそうにない涼子の様子に小さくため息を吐いて、ジローは自宅に足を向けた。涼子もその後ろを二、三步遅れてついていく。

ジローの家は畑に近く、町からはほんの少し外れた場所にある。

両親と暮らしていた家は町の中にあるのだが、一人では広すぎたためにそこは引き払って今使っている1LKサイズの小屋に越してきたのだ。

帰ってきてすぐリビングに涼子を座らせると、パパッと淹れた紅茶と買い置き菓子を出してジロー自身も腰を落ち着ける。なんとなく話の先が見えているので、ジローはすでに誤魔化すという思考を放棄していた。

二人はリビングのテーブルを挟んで向かい合っているが、聞いたことがあると言った涼子は紅茶のカップを両手で持ったまま一向に口を開かず、じつと何かを考え込んでいる。聞きたいことは決まっているものの、どう切り出せばいいのか分からないのかもしれない。

ジローはジローで特に急かすこともなく、自分で淹れた紅茶の味に眉を顰めつつクッキーもどきの菓子をちまちまと食している。最大級の厄介事と判断したセフィロスがサツサといなくなってくれたので心に余裕があるのだ。開き直れるだけの余裕が。

そうしてしばらくサクサクと焼き菓子を咀嚼する音だけが小屋の中に響いていたが、十分三十分と経っても沈黙は続き、菓子受けの皿が空になって一時間が過ぎようという頃には流石に黙りすぎだろとジローも思い始める。

何をそんなに悩んでいるのかと俯き加減の涼子を見やると、そこ

では顔を蒼白にして脂汗をかきまくった半死人が盛大に目を泳がせていた。

「……（ぶほっ！？）」

危うく吹き出すところだったが何とか堪えてよく観察すると、体調不良というよりも精神的に参っているようだというのが分かる。カップを握る手は力を入れすぎているのか真っ白だ。

こんなになるまで何を悩んでいるのかと呆れるジローだったが、それだけ不安が大きいのだと解釈することにした。涼子が外見どおりの年齢で、かつジローの予想した通りの経験をしているなら、むしろ正気でいられたことを褒めるべきかもしれない。脳内がハッピーそうなセフィロスと一緒に現れたせいかその辺りの考えが飛んでいたようだ。

このままでは本当に体調を崩しかねないので、ジローは仕方なく助け舟を出すことにした。わざわざ見知らぬ土地で初対面の異郷の人間についてきてまで訊ねたいことに心当たりはあるし、無意識にとはいえ自分でヒントを与えてしまってもいたのだから。

「ところで一つ聞きたいんだが」

「っあ……は、はい、何でしょう？」

普通に声をかけられただけでビクリと肩を震わせた涼子は、その拍子に紅茶が零れたのにも気付かず上目遣いにジローを窺う。その表情は態度と合わせてとても弱弱しく、しかしどこか森から出てきたばかりの時に見た警戒心剥き出しの表情にも似ていた。

そんな涼子の様子にため息を吐きたくなりながらも、ジローは肝心の言葉を続ける。

「 向こうはいま、平成何年くらいなのかな? 」

紅茶のカップが一つ、テーブルの上に転がった。

第一話 その男、危険につき（厨二的な意味で）（後書き）

ふと思いついて書いたものを衝動的に載せてみたんだが……果たして続くのだろうか、コレ。

追記：続きました。

## 第二話 最初の道程（前書き）

ようやく二話目です。時間かかりすぎだと自分でも思います。説明というか解説が多い気がするけど、次回は戦闘描写もやってみたい。

## 第二話 最初の道程

「えー……服は全部、毛布を二枚とシートが一枚、水と酒と非常食を少々、料理道具一式、各種食器類、清潔な布と包帯、サバイバルキット。あと持っていく物は何かあったっけか？」

少ない私物と日用品を詰め込んだ旅行鞆の中身を点検しながら、ジローは他に足りないものはないかと考える。貯金や盗難に備えてのヘソクリは所持金ごと財布に入れてしまったので問題ないし、日持ちしない食物はご近所さんに配ったので家には家具しか残っていない。小物の類は元々持っていないのだ。

隣では、動きやすさを重視した旅人らしい装いの涼子が小さめのナップザックに如何にしてブレザーの制服を皺にならないように収めるかで苦闘していた。

麻や絹製の衣服は順番待ちらしく綺麗に畳まれて傍に置かれていく。どうやら着る機会が少なくなると思われるブレザーを奥に仕舞いたいようだ。

「ん、と。よし！ じろうさん、準備終わりました」

「おう、そんじゃ行こうか」

ようやく納得のいく収め方ができたのか、革のナップザックを背負って涼子が立ち上がる。ジローもそれに応えて鞆を閉じた。

また住人がいなくなることになった小屋を出ると、振り返ることもないまま町にある簡素な門へ向かう。町からやや外れた場所に小屋はあったが、目的地の方角的に一度町を通り抜ける必要があるの

だ。

「わたしインドア派だったんでこういうのは初めてですけど、邪魔にならないよう頑張りますね！」

「あー、まあ長くても二日かそこらだろうし、道中にもあんまり危険な魔獣はいないだろうからそんなに構えなくても大丈夫だろ」

異世界の旅ということで少しテンションが上がリ気味の涼子に苦笑しながら言葉を返して、ジローはなんでこうなったんだかと真っ青な空を見上げる。その視線の先を飛ぶ二羽の鳥をぼつと眺めながら、こうして二人一緒に旅立つことになった経緯を思い返した。

「 やっぱり貴方も“こっち”のヒトなんですねっ!？」

弾けるように立ち上がった涼子は、身を乗り出しながら喜色を浮かべてそう言った。

何に喜んでいるのかジローにはいまいち理解できなかったが、その“やっぱり”という発言からやはり思い当たってはいたのだろう。畑での短いやり取りで分かるほどジローの態度に出ていたのか、それとも涼子が鋭いのか。

ともかく、ジローは肯いてみせると紙とペンを持ってきて『前世』での自分の名前や故郷を漢字と平仮名を使って書いてみせる。ジロー

クロードとして生まれて以来、実に二十年ぶりだったが、意外と覚えていたものでサラサラと書くことができていた。

だがそれを見て、少し落ち着きを取り戻していた涼子がふと疑問の声を上げる。

「あの、じろうさんは日本人なんですよね？ どっちかっていうと西洋系の顔立ちに見えるんですけど……じろうさんも容姿を変えたんですか？」

「生憎とこの顔は生まれつきだ。しかし、“も”ってのはどういうことだ？」

「え？ あー、えつとですな……」

ジローの問いに少しうろたえながらも、涼子は自分の身に起きた出来事を話し始めた。

なんでも“元の世界”で事故に巻き込まれて死んでしまったが、神を自称するノリの軽い女性が現れて「今回のことは手違いで、本当なら死ぬはずではなかった」と言ってお詫びに異世界へ転生させてくれると言いだしたらしい。

最初は頭がアレな人かと思ったが、変な空間にいた事から一応は信じることにしたという。その時、いつからいたのか同じく死んだらしい男が喜び勇んで滅茶苦茶な条件を付け足していて、容姿の変更もその一つだったんだとか。

涼子自身は能力を一つ貰うだけで済まして“この世界”へ来たが、困ったことに森の中。しかも傍には何故かセフィロスが。

「それで、馴れ馴れしく話しかけてきたときに熊と豚を掛け合わせたような生き物が出てきて……それをアイツが吹き飛ばしたんです。

たしか『スターライトブレイカー』とか言っていました」

「やっぱりアレの犯人はアイツか。それにしても、俺の時とは随分と違うな」

ジローは自分が転生した時の事を話しながら、先程の話と比べてみた。とにかく神様の品格に差がありすぎると思う。

ジローの出会った神様は名に恥じない超絶的な覇気を感じさせていたが、涼子が会ったという神様はどこかチャランポランな印象を受ける。例えるなら会社の大重役と、道楽でOLやってる社長令嬢くらいの差が見られるのだ。

どちらがよかったかと聞かれると反応に困るが、ジローは済んだことなので気にしない方向で考えを纏めた。

一方、ジローの時の話を聞いた涼子は自身とのあまりの違いに愕然としていた。ネット小説的に言うならジローにはチートタグが付くだろうが、涼子にはチート（笑）タグが付く。場合によっては俗にいう最低系に分類されてしまうし、セフィロスなどはもうすでに手遅れである。

「ま、そんなわけで俺は“この世界”の人間でもあるわけだ。ジークロードって名前がその証だな。個人的にはジローと呼ばれた方が嬉しいんだが」

「なら、わたしはこれから“じろっさん”って呼びますね」

「そうしてくれ。さて、じゃあそろそろテーブルの上を片付けるか」

「テーブル？ あ、あー！？ ごめんなさいっ」

涼子が転がしたカップから零れ出た紅茶が水溜りを作っているのを、流石にいつまでも無視しておくわけにもいかない。会話に一区切り付いたところでジローは布巾を取りに立ち上がり、慌てて謝罪する涼子の言葉は適当に聞き流す。この程度のことと怒るようなら畑を吹き飛ばされた時点で暴れている。

結局一人で空にしてしまった皿とカップを二つとも回収して流し台へ置き、紅茶を布巾でさっと拭きとると隠れていた木目が綺麗に映し出された。表面がつるつるになるまで丹念に鑢と漆塗りを繰り返しただけあり、このテーブルの拭き掃除はとても楽だ。

新しく用意したカップに暖めなおした紅茶を注ぎ、二人分をまたテーブルに出すと涼子も今度は落ち着いて受け取った。礼を告げ、カップを一口。

「……………緑茶？」

「淹れたてのより飲める味にはなってるぞ。元は紅茶のはずだけだな」

そう言ってジローも緑茶味に変質した紅茶を啜る。それなりに練習しているものの、お茶を淹れるのはあまり上手くないのだ。

数分ほどの間、茶を啜る音だけが室内を満たす。家に着いた当初の居心地の悪い雰囲気も大分薄れ、田舎町特有のほほんとした空気を涼子も感じられるようになってきた。カップを置いて、ほう…と息を吐く。

茶を飲み終える頃には緊張のし過ぎで悪くなっていた顔色も大分良くなり、不健康な汗も引いて人間らしい血色を取り戻していた。

「なんだか、ようやく安心できたような気がします」

「無理もないな。死んだと思っただけならいきなり神さまだの、異世界だの、転生だの、厨二病だの……普通なら自分の頭を疑うところだ」

ジローには現在までに二十年という熟考する時間があった。それだけあれば前世の未練にも折り合いはつけられるし、慣れることもできる。人間の順応力は住む世界が変わった程度では害われないということをも身をもって体験したが故に冗談のような言葉も言えるのだ。

それに対して、涼子は自分の死を認識してからまだ半日と経っていない。しかもジローのような真正正銘の転生と違って、死んだときと何ら変わらない肉体を持っている。これでは死の実感さえもあやふやになってしまっているだろう。

涼子からしたら、現在は性質の悪い夢を見ているようなもので現実感希薄になっているのかもしれない。ジロー自身、意識がハッキリとしたばかりの頃は前世の記憶は今の自分が見ただけの夢だったのではないかと考えたこともある。あるいはその逆で今が夢なのか、と。

けれどそれを否定する自分も居て、今が前から続いていると妙に確信できていたからこそ『ジロー』と名乗っているのだ。

「まあその話はいいか。肝心なのは、いま自分が生きていて、これからもこの世界で生きていくしかないってことだからな。」

「で、実際のところ向こうは平成何年なんだ？　もしかしてもう年号も変わってるとか？」

「いえ、平成ですよ。たしか2X年だったはずですよ」

「2X年？　俺が死んだのも同じ年なんだが……これも異世界の不思議ってやつか」

“この世界”と“元の世界”では時間の流れが違うとかそういう事なのだろう。同じ年代を生きたもの同士ということが分かっただけ十分で、それ以上の細かいことは気にするだけ無駄だ。数式と一緒に『これはこういうものだ』と理解することが魔法なんてものが存在する世界で生きるコツなのだ。とジローは学習している。

それよりも、とジローは目の前で手持ち無沙汰に中身を飲み終わって空になったカップを弄くっている涼子を見た。

今のところは落ち着いているようだが、このまま放り出しても何処かで野垂れ死ぬか、そうでなくても神から貰った力によっては何かしら問題を起こす可能性は高い。

先程までの反応などを鑑みるに、涼子はセフィロスと違って常識的な人間のようなので元の世界の常識で考えて物事に当たると思われる。大まかにはそれでも問題ないとは思うが、この世界には日本のように銃刀法違反なんて法律は無いからちよつとした喧嘩が殺し合いに発展することだってザラにあるのだ。

折角出会えた同郷を見捨てるのはジローとしても忍びないので、せめてこの世界で生きていけるだけの知識と常識を教えるくらいはしてあげようと思っっている。涼子もセフィロスほどではないにしても気楽に考えられれば、それほど苦労しないで済むのだろうが。

「んで。井上はこれからどうするんだ？　もし良かったら、この世界で暮らしていけるようにある程度は協力してやれるぞ」

「それは、わたしとしては願ったり叶ったりですけど……いいんですか？」

「気にするなよ。せつかく会えた同郷の人間が、認識不足で不幸に見舞われたら俺の寝覚めが悪くなるし……ん？　そういえば随分流暢に喋るな。それも転生の特典か？」

「え……いえ、聞いてませんけど」

言いながら、何から教えるべきかと考えていて気付いた。涼子はジローと同じくこの世界の言語で喋っているのだ。神の仕業であると考えるのが妥当だが、

注視してみると口の動き方までしっかりと同じだった。芸が細かい。

涼子は喋るのも聞き取るのも日本語と認識しているようなので、脳に何らかの細工をしているのだろう。もしくは神通力というものかもしれないが。

そこでふと考え、きちんと意識すれば日本語で会話することも可能かもしれないと思い至ると、ジローは早速それを試みた。

『まあ便利だし、気にするほどのことでもないな』

『そうですね。ただ、文字となると分かりませんが』

『文字か……ちなみに、井上の名前をこの世界風に書くと、こうなる』

『うわ、なんですこのロシア語とギリシャ語を混ぜ込んだみたいなの。全然読め……る？　なんで!?!』

『ふむ。神通力恐るべし、と言ったところか』

『助かりますけど、頭の中身を弄くられたみたいで釈然としません……』

言葉のついでに文字も、とやってみればこちらも問題なし。過程のいい加減さに比してアフターケアは万全らしい。それにジローが日本語に切り替えた途端、涼子も日本語で返してきた。本人は気付いていないようなので、意識する必要すらないようだ。

もしかしたら相対した対象と意思疎通を可能とする能力か何かなのだろうか。もっとも、この世界の言語は基本統一されているので単純にその言語がインプットされているだけなのかもしれない。その辺を確認するにはそれこそ精霊あたりと会話する必要がある。

精霊は所謂、精霊語というのを使うと云われているのだ。人前に姿を見せない、または数が少なく僻地に存在すると云われ、半ば伝説とされている精霊に出会うことは、まず不可能だが。

「しかし、本当に便利だな。日本語も問題なく話せるみたいだし、セフィロス以外の奴の前でなら何言っても気付かれないだろ」

「は？」

「井上は気付いてなかったみたいだが、さっきまでは日本語で話してたんだ」

「……本当に、釈然としません」

今の心情は、無いと困っただろうことは理解できたが納得はいかないといったところか。勝手に改造されたようなものだから、それは慥然とした態度になるのも仕方がないだろう。眉間に皺を寄せて口を尖らせる涼子を見て、ジローは可笑しげに低く笑った。

とりあえず、文字と会話は大丈夫だった。この調子なら書くことも出来るだろうし、無理だったとしても読めるのだから学習するのはそれほど難しくないはずだ。ならばまず教える必要があるのはこの世界においての歴史や常識、それに金銭関係くらいだろうか。基

礎さえ分かれば凡その事は自分で学ぶことが出来るようになるのだから、それで十分かもしれない。

もつとも、どうするにしたって町から離れるジローには直接してやれることなど殆どないのだが。

「それで今後のことだが、俺は町を離れることになるから井上のことは信頼できる女性に任せようと思う」

「ええっ！？ どうしてですか？」

「どうしてもなにも、畑が跡形もなくなったんじゃ食っていけないからな。近くの都市に働きに出るんだよ」

やや大仰な仕草で驚く涼子に言葉を返しながら、ジローはそこまですで意外だろうかと少し考える。

いくら同郷の人間だからとて見知らぬ他人、それも異性を早々と信用するものではない。確かに価値観がまるで違う異世界で独りきりになるよりは幾分か気が楽かもしれないが、それも元の世界に帰れない以上はいずれ慣れなければならぬことだ。

涼子がどの程度“今”を受け入れているかにもよるが、なるべく早くこの世界に馴染まなければ精神的にも辛くなってくるだろう。そういう意味でも同性に面倒を見てもらった方が得策であることは間違いない。

そうなると、やはり不安が大きいからか。ジローとは元々持っていた観念が同じだったからこうして自然体に近い態度でいらられるだけで、一人で現状に向き合うのはまだ無理なのだろう。

近くにいれば何かしら起こった際にすぐフォローできるが、ジロー自身生活に余裕があるわけでもないので余り涼子に構ってばかりもいられない。可哀そうだが、先のことも考えれば涼子のためにも

ここは突き放したほうが懸命なのだ。

その旨を伝えるためにジローは涼子をひたと見つめて口を開き…  
…結局、何も言えずに言葉を飲み込んでしまった。

「おねがいますっ、わたしも連れて行って……おいてかないで…  
…」

可愛らしいぱっちりとした瞳に今にも零れそうなほど涙を溜めて、上目遣いにそう懇願されては堪ったものではない。しかも相手は日本人の観点から見なくとも十分な美少女である。いつの間にか伸ばされていた手はジローの手首をしっかりと掴んでいたりするし、これで人目があればもう完璧に逃げ場がなかっただろう。

本能とか良心に訴えかけてくるような涼子の様子を見て、この半日に満たない短い時間でよくも懐かれたものだと思いつながらジローは諦めたようにため息を吐いた。

「……わかった。連れてくから泣くんじゃないぞ」

「あ、ありがとうございます！」

目尻にまだ光るものがあるものの、涼子は曇り空が晴れるように笑顔になって嬉しそうに答える。それを受けるジローは苦笑いだが。

このやりとり、見ようによつては好きな人と離れたくなくて我侭を言った少女とその我侭を聞いてあげた彼氏のように見えなくもない。だが実際のところは、この見も知らぬ世界で異邦人として独り取り残されることを恐れた涼子が目下頼りにできる同郷人であるジローの庇護を求めたというだけである。

死んで異世界に来たという現実と向き合いながらこの世界の人間の世話になることと、その現実を受け入れて既に自立している同じ

境遇の男を頼ること。

主観的にはたった独りで挑まなければならぬ前者より、後者に迎合した方が負担は少なく済むと考えたのだ。異性への警戒心はもちろんあるだろうが、それよりも未知への恐怖の方が涼子には耐え難いのもかもしれない。

「そんじゃまあ、今日の所はここに泊まってくれ。俺は家を引き払う準備をしなきゃならんから大人しくしておけよ」

「はい。ご迷惑お掛けします」

そうして数日を準備に駆け回って今に至るのだが、もっと早くに涼子の能力を聞いておけばよかったとジローは今更なことを考えてみる。最初から分かっていたれば出費も抑えられたのに、と。

「じろーさん、飴食べます?」

「ああ、貰つよ」

たったいま涼子に“創り出された”丸い飴を受け取って口に入れる。イチゴの味がジローの口腔内に広がった。

この通り、涼子が神に貰った能力は 物を創造する能力だ。

これの恐ろしさや利便さは、生物以外はほぼ全て創ることが出来るという自由度の高さを知れば誰にでも分かるだろう。さらにこの能力は、創り出す物を詳細に知っている必要は無く、一度でも見たことがあつて用途を把握していればそれが実物でなくてもキツチリ本物を再現してくれる親切設計。創った物を創造者の任意で消すこともできるらしく、正しくチートと呼ぶに相応しい。

こんなスーパー能力があるのなら放つておいても早々野垂れ死ぬことなどないと思うものの、ジローとしても今更やっぱり止めますというわけにもいかないのです、別の事を危惧して注意だけをしている。

「井上、くどいようだがなるべく人目のある所では能力を使うなよ。使うとしてもバレないように配慮するんだ」

「わかってます。この能力を利用してしようとする人が絶対にいるでしょうし」

涼子が創り出せる物には生物以外の制限がない。そのため、やろうと思えば無限に物を創ることだってできるのだ。涼子一人がいるだけで、世界規模の飢餓すら容易く乗り越えられると知れば誰だって放っておかないだろう。“井上 涼子” 一個人への配慮など一切なく、生産プラント程度の認識で群がってくるのは簡単に想像できることだった。

仮に涼子の能力が知られて捕まったとすれば、最低でも二度目の人生に絶望する羽目になる。

そうさせないためにも、例えば涼子がキッチンと理解していようとジローはこれからも口を酸っぱくして言い聞かせていかなければならない。

「しかし、セフィロスのやつが早い段階で町を出ていてくれたのは助かったな」

「そうですね……アレとは、できるだけ関わり合いになりたくありませんし」

ジローの前から逃げるように去っていったセフィロスは、どうやらあの後すぐに町を出ていったようだ。町人の話では冒険者になるため王都に向かったということだが、死んだ自覚があるのか怪しいほどの行動力である。見るからに能天気そうではあったが、無思慮にジローの畑を吹き飛ばした事やいまいち常識の欠けた言動を鑑みるに、もしかしなくとも頭は悪いのかもしれない。

涼子のように視界に入れることすら許したくない、とまではいかないが、トラブルを運んでくる事が確定しているような人間と積極的に関わろうと考えるほどジローも今の人生に退屈していなかったのも、変に関わらずにすんだのは僥倖だった。

まだ、ジローだけなら既に存在を忘却されている可能性もあったのだが、生憎と涼子のごときはキツチリ覚えていることだろう。見かけたならまず絡んでくると予想できるし、そのついでにトラブルを擦り付けてくるのは分かりきっている。そう考えると、目的地も違いいこの先も滅多に関わることがないであろう現在の状況はやはり運がいいのか。

早朝ゆえにほとんどの町人が畑仕事に出ているか寝ているかで人影の少ない静かな町を歩きながら、ジローはそんな益体も無いことを思う。なんにしる、セフィロスに出会った時点で不運なのは間違いないので考えるだけ無駄なことではあった。

そうして限りなく陰口に近い事実を憶測を交えつつあーだこーだと言ひ合ひ、すぐに行き着いた町の出入り口で門番に軽く会釈をす

ると、簡素な門を潜り抜けて外へと踏み出す。

「さて、それじゃあ簡単にこの世界での旅の仕方についてレクチャ―するぞ」

「はい！」

草を取り払い踏み固められた道を歩きながら、ジローは現在必要だと思える事柄を知りえる範囲で伝えていく。とりあえずコレを知っていればこの辺では早々死にはしないという、そんな程度の知識だが。

まず、基本的に魔物や魔獣を警戒するのは当然として、盗賊への対処も考えなければならぬ。この辺りには殆どいないが、一人もいないというわけでもないのだ。

簡単な対処法から挙げていくと、まず第一になるべく目立たない服装でいること。一目で値が張りそうだと分かる品を身に着けていれば格好の餌食となるのは少し考えれば分かるだろう。

同様に大きな荷物を持ち歩くのもよろしくない。そういう物を運ばなければならぬ時は運送屋に頼むか護衛を雇うかした方が無難だ。

ただし、外敵をどうにかできる実力があるのならどちらもあまり気にする必要はない。これらの注意事項はあくまで自衛手段に乏しい一般人が気をつけておくべき事柄だからである。

他にも、半径4km以内ならば記憶させておいた場所に一瞬で移動することが出来る【テレポトシエム転移結晶】や【転移符】を用意しておけば逃げるだけなら簡単にすむ。もっとも、これらは非常に高価なので中流家庭クラスの収入しかないのならば常備は困難だろう。また、個人で扱う転移魔法は習得難度も魔力消費も非常識に高いので一般的ではない。

以上を踏まえて盗賊については、もし治安の悪い場所を旅するなら十分な備えをしておく必要がある。とだけ覚えればいいだろう。当たり前だが、女性の一人旅などは論外である。

次に注意したいのは、先にも述べたとおり魔物や魔獣といった人間の害になる生き物たちについてだ。

害と言っても様々あるし、中には共存可能な種や何の害も齎さないモノもいるのだが……挙げていけば限がないのでそれは割愛してとりあえずはグラツェールから近隣都市までに出没する可能性があるモンスターのことを説明しよう。

魔獣では魔力がある以外に狼とさして差が無い【ステッペンウルフ】を筆頭に、耳が刃物のように鋭いウサギのような姿の【スラッシュラビット】や猪の数倍は大きい体躯を持つ【ストライクボア】、そして稀にだが頭部が巨大化した鷹としかいいようのない【ビルドホーク】などが見かけられる。

魔物はこの近辺には殆ど生息しておらず、いたとしてもどこか憎めない愛嬌を漂わせる饅頭のような見た目の【ブヌ】くらいなものだ。

因みに、魔物と魔獣の違いは殺した時に死体が残るか残らないかの違いでしかない。魔物は死体が残らず、魔獣は死体が残る。それ以外にも、魔獣は曲がりなりに生物として真つ当な姿形をしているのに対し、魔物は生物とすら判断できない見た目のモノも多いなどの違いもあるのだが、大きい違いはそれだけだ。

ともあれ。

この中で特に注意しなければならないのは、なんとと言ってもスラッシュラビットだろう。夜は寝ていて行動しないが、昼間は活発に動き回って自分以外に動くものを見つけると下手な刃物より切れ味鋭い耳を使って襲い掛かってくる。ただ、草食なので遭遇した場合、

倒す自信がなければ興味を失って何処かに行くまでジツとしていれ  
ばやり過ぎす事は十分可能だ。

ステツペンウルフは昼間のうちはあまり行動せず、火を恐れるの  
で夜間も焚き火をしていればあまり心配はいらないし、ストライク  
ボアは行動範囲が巢のある森の近辺のみなので其処に近寄らなけれ  
ば問題ない。ビルドホークなどは早々目に付く魔獣でもないし、屍  
肉を漁る以外の目的で地上に降りてくることもないので気にするだ  
け無駄だったりする。放っておくと無限に増殖するブヌにしても数  
匹程度ならなんの危険性もなく、見かけたら踏み潰すなりして退治  
しておけばいい。

「とまあ、だいたいそんな感じか」

まだ野営の仕方などもあるが、こういった元の世界では在り得な  
いようなことに関するもの以外は、キャンプするのと大した違いは  
ないのでそこまで詳しく語ることもないだろう。

ジロー自身も他国どころかこの国の王都にすら行ったことがない  
のであまり専門的な知識があるというわけでもなく、あくまでこの  
近辺に限った短い旅を行える程度の簡単なことなのだ。野営の方法  
も実践してみせれば、後は食べられる野草くらいしかジローが教え  
られる事など残っていない。

それでも涼子からしてみれば十分ありがたいことではあるのだが。

「なんだか、本当に異世界って感じですね。魔物とか魔獣とか……  
やっぱり、殺したりとかするんですよね」

「襲われたらな。まあ今回は俺がいるし、今後も旅をするつもりが  
あるならその時は護衛を雇えば井上の手でどうこうする必要はな  
くなるだろ」

日本で生まれ育ち、命を奪うことを禁忌と教わり平穩に慣れきっていた状態では、命の遣り取りなど想像もつかないことだろう。ジローとて順応できるようにはなつたが、相手が人以外だったとしても命を奪うことに慣れたわけではない。自分の最初の頃を思い出せば涼子の今の心境もいくらかは推し量れた。

故に、安易に触れることはできない。

この世界のシビアさをどう消化できるかで今後の生き方も決まってくるのだ。他人に言われたことではなく、自分自身で考えて決心することこそが大事なのだと、ジローは経験から知っている。

だから意気消沈してしまつた涼子の様子を見ても、あえて無視して話を進めていく。心の問題は急がせても良い方へは転がってくれないのだから。

「手を抜けばこつちが死ぬ破目になるんだ。それが嫌なら、敵を倒せる力を付けるか、なるべく安全な所にいるしかない。

その点、いま向かつてる都市は外敵への守りも確りとしてるし治安も良いから定住するにはうってつけだな」

「定住……そういえば、ジローさんは冒険者とかにはならないんですか？ たしか、けっこう凄い能力を貰ってましたよね」

命をどうにかする、という事を考えるのは一先ず置いておくことにしたのか、涼子が別の話を持ち出してきたのでジローも思考を切り替える。

結局は涼子が自分で答えを出さなければならぬ問題だ。それは涼子自身が一番よく分かっているだろうし、切迫した状況でもないのだから焦る必要も無い。そんな中でジローにできるのは精々気を紛らわせてやることくらいだろう。

「俺か？ そりゃアレはかなりのチートだけどさ、強すぎて逆にあ

んまり使おうとは思えないんだよな。

冒険者に憧れてた時期もあるにはあったけど、今は何よりも平穩無事に過ごすことが第一だし」

「なんだか勿体無い気がしますけど……でも、その方がいいのかもしれないですね」

「強すぎる力は身を滅ぼすとも云うしな。それに畑仕事の合間に鍛えた俄か護身術だけでもこの辺の敵には十分だし、少しとはいえ魔法も使えるからアレに頼ることもそうないんだよ」

実際、ステツペンウルフの動きを簡単に見切れるだけの動体視力とストライクボアを一撃で絶命させられるだけの身体能力を持っていて、この近辺でやられるなんてことはそれこそ以前のように居ないはずの強力な魔物でも出ない限りはありえないことだ。魔法を使う必要すらない。

「え？　じろっさん魔法使えるんえすか！？」

「言っただけだったか？　ま、初歩の初歩だけでとても魔術師は名乗れないけどさ」

驚愕と興味と羨望の眼差しで見つめてくる涼子を軽くあしらって、指先に小さな火を灯してみせた。

これは初級の攻撃魔法の中でも最も簡単な火の魔法《ファイア》の出力を最小に絞ったものだ。本来はソフトボール程度の大きさの火の玉を直線的に打ち出す魔法のだが、やろうと思えばジローがしているように出力を調節したり手元に留めておくことも可能なのである。

それに、ジローは魔力こそ中級魔術師並にあるものの、あまり得

意ではないため使える魔法はまだ最低位の攻撃魔法である《ファイア》と同じく血止めと消毒程度の効力しかない最低位の治癒魔法を一つだけだった。

それでも涼子にとっては凄いことのように、瞳をキラキラさせてジローの指先で揺れる火を眺めている。

「あ、あのっ……これってわたしにも使えますか？」

「魔法をか？ ふむ……」

随分と興奮した様子で迫ってくる涼子から身を引きながら、ジローは指先の火を霧散させて顎に手を添えた。魔法を使う者は皆が持っている、魔力を感じ取るための神経を集中して魔力の波動を探してみたが、涼子の中にそれらしいものは感じ取れない。

ジローのコレは、それなりに距離が離れていただろうセフィロスの『スターライトブレイカー』の発動を感知できる程度には優れているため、この至近距離で視えないなんてことはないはずだが、それでも無理となれば理由は三つほど考えられる。

一つは、そもそも魔力が存在しない場合。元々無いものはいくら探そうと見つけようがない。

次に、魔力が大きすぎる場合。あまりにも保有魔力が大きき者は、近くに居ると感覚が麻痺して逆に感じ取れなくなるのだ。これは相手と自分の保有魔力に差があればあるほど顕著になるので、魔術師同士が相対したときに真つ先に気にする部分でもある。

最後に、特殊な隠蔽工作を施している場合。専用の魔道具や特定の魔法を用いることによって魔力波動を乱れさせ感知され難くすることが可能なのだ。

涼子の場合は恐らく一つ目に挙げたように、そもそも魔力が無いのだろう。

隠蔽用の魔道具など身に付けていないし、魔法の使い方も知らない。神に貰ったという能力も『創造』ただ一つだし、実際に使っているところを見ても魔力をエネルギーにしているわけではないようだった。

魔力が大きすぎてジローの感覚が麻痺している可能性もないことはないが、その場合は“感知神経が麻痺していることを感知する”という裏技的な技術があり、その感知が働いていないことがそうではないことの証明になっている。勿論これは誰にでもできるほど簡単なものではないが、幸いと云うべきかジローはこれを習得しているので間違えようはずもない。

なので、非常に残念ながらジローはその旨を涼子に伝えねばならなかった。

「……………無理だな。魔力が存在しない」

「そんなあ……………アイツは使えてたのに」

「セフィロスは神に魔力も貰ってたんだろ。大きすぎてどれ位かは分からなかったが」

無念そうに肩を落とす涼子に苦笑しながら、今更にセフィロスに對して感知が働いていたことを思い出した。遭遇時はそれに気付く余裕もなかったのだが、考えてみればそれなりの規模の焔を根こそぎ吹き飛ばす魔法を使ってケロツとしているような奴なのだから化物染みた魔力を保有していても不思議ではない。

何より、厨二病を患っていそうなセフィロスのことだから《魔力》などを要求していたとしても素直に納得できた。

「『創造』だけでも十分チートなんだから、そんなに気にする事でもないだろ。俺は魔法よりそっちの方が羨ましいぞ」

なにせ究極の自給自足である。それも欠片の労力も伴わない、怠け者でなくても喉から手が出るほど欲しがる能力だろう。

今はまだ飴のような菓子類くらいしか創っていないから涼子も実感が湧かないのかもしれないが、この『創造』能力にはそれこそ想像を絶するほどの可能性が秘められてると言っても過言ではない。

一度見たことがあり、その用途が解っていれば“実物でなくても”創り出すことが出来る。それはつまり、実在していなくともその情報さえ確認したことがあれば例え漫画の武器だろうがゲームのアイテムだろうがお構いなしに『創造』してしまえるということなのだ。

涼子を知るもの限定されはするが、仮にも現代っ子が二次元的な娯楽を何も知らないということはないだろう。RPGの一つでもやったことがあれば、それだけで十分に脅威となる。

これはあくまでジローの予想であり実際に確かめてはいないものの、もし予想通りだったとしたら涼子の自衛能力と危険度が跳ね上がってしまう。そのため中々切り出せずにいるのだが、涼子の今後を大きく左右する事柄であるのは確かなので都市に辿り着く前には話しておかなければならない。街中ではどこに目耳があるか分かったものではないのだから。

「んー……確かに便利ではあるんですけど。なんか、こう、パツとしないっていうか……ハッキリ言って地味じゃないですか。衣食住全部賄えるのは自分でも凄いなと思いますよ？でも実用性はばっかりっていうのもロマンに欠けるといかなんというか……」

「俺は気付かれ難くて良いと思うが、それらしいエフェクトも何も

ないからな。唐突に感じるのは仕方ないんじゃないか」

ああだったら面白い、こうだったら良かったのに、と身振り手振りで伝えようとする姿は大変微笑ましく、ジローも適度に相槌を打っては笑みを浮かべる。

その様子は誰が見ても友人同士の気安いソレであり、とても出会うて数日とは思えないくらいに二人の関係は良い方向に進んでいるようだった。

ジローも涼子も出会った当初はお互いに警戒していたし、少し前に町を出たときも双方ともやや緊張気味だったのだが、気が付いてみれば彼我の距離間隔はだいたい30cmかそこら。出会った当初は人が一人か二人は入れるほどであった間が短時間でこうまで縮んだのは、果たしてジローの人徳か、それともそれだけ涼子の不安が大きいのか。

どちらにしろ、涼子は自分の状態に気付いていないのでジローが頭を悩ませる必要があるようだ。

「手パンでバリバリって発光しながら出てくるとかつこよくないですか？」

「開けちゃいけない扉を開けそうだからお兄さんは遠慮したいね」

そうして談笑している間に時は過ぎ、途中に休憩を挟みながらも何とか日が沈む前に野営に適していそうな場所まで辿り着くことまでできていた。

この日は外敵と遭遇することもなく、ジローは予定通り簡単な野営の仕方を涼子に教えると交代で睡眠をとり翌朝早くには都市へ向けて出発したのだった。



### 第三話 二人目（厨二は別枠）（前書き）

戦闘って難しい。けどそれ以上に人物を動かすのが難しい。  
最後の5kbを捻り出すのにほぼ一年かかりました……（、・  
・）

### 第三話 二人目（厨二は別枠）

グラツェールを出立してから二日目の正午。一日目は何事も無く過ぎてくれたのだが、今日も同じようにはいかせてくれないらしい。ジローにとっては忘れようも無い両親が殺された現場である案内板を何食わぬ顔で通り過ぎ、あと数時間も歩けば目指す都市が見えてくるといった所でついに魔獣に遭遇したのである。

相手は灰色の体毛に鋭い牙と爪を持ち、60cm前後の体高を揺り動かしながら翡翠の瞳を光らせる魔獣。ステツペンウルフだ。

数は三体。其々が低い唸り声を発しながらジローと涼子の周りを囲んで隙を窺っている。縦に割れた獣の瞳孔はギラついており、牙を覗かせる口端から垂れる涎が彼らが空腹であることを分かり易く伝えていた。

「じ、じろつさん……」

初めて感じるのであろう生物からの明確な殺気に呑まれて竦んでしまった涼子が震える声で隣のジローに呼びかける。恐怖から無意識に縫れる相手の名を口にしただけかもしれないが、直接縫らなかつただけ随分マシな状態と言えよう。身体は固まっているものの視線はステツペンウルフから外していないし、この方が下手に取り乱されるよりはジローもやり易い。

「いいか井上、絶対に動くなよ」

涼子にそう命じて自分の荷物を降ろすと、ジローは全身に魔力を巡らせた。そうすることによって僅かではあるものの身体能力を底上げすることができるからだが、それ以外にも両手には薄っすらと青白く光る魔力の膜が現れている。

これはジローが徒手空拳で戦うため手を傷めないように魔力を収束することで籠手の代わりにしているのだ。普通に籠手を装備するより楽だし、少なくとも鉄製品よりは頑丈なので重宝しているのだが、あくまで籠手代わりでしかなくそれ以上の特別な効果は無い。

この状態での殴り合いがジローのいつもの戦闘スタイルだ。力み過ぎない程度に筋肉を緊張させながら右半身を引いて胸の高さに拳を構える。半端な知識を基にした我流体術なので正確な型も何もないのだが、日々の鍛錬と今までの戦闘経験のお蔭で、それなりに無駄の削れた身のこなしは可能にしていた。

ジローが構えをとってから十数秒の間、睨み合いを続けていたがよほど腹が減っていたのか、焦れた様子の子のステツペンウルフは自身の魔力を活性化させると三方向から少しずつタイミングをずらして飛び掛ってきた。

涼子は思わず目を瞑るが、ジローは慌てずに飛び掛ってくるステツペンウルフの中、自分に向かってくる一匹を少し身体を捻ることで避け、涼子を狙っていた二匹を僅かな時間差を利用して先に手前の一匹の顔を横殴りに弾き飛ばし、次いで飛んできた一匹は裏拳気味に振り戻した腕で体を掬い上げることで突っ込んできた勢いそのままに投げ飛ばす。その一拍後にはジローに避けられたステツペンウルフが背後から再び襲い掛かるも、それを察知してしゃがみ込むと頭上を通り過ぎる寸前で腹部に強烈なアッパーを叩き込むことで返り討ちにする。

この一撃でまず一匹が絶命した。

最初に殴り飛ばされた一匹は頭部に軽くないダメージを負ったためかフラついていてまだ次の行動に移れそうにない。その間に少し遠くへ放り投げられた一匹が初動以上の速度と勢いでもって再度突撃してくるが、また投げられることを警戒してか飛び上がらずに低姿勢のまま足を狙って噛み付いてきた。ジローはその開ききり閉じる半瞬手前の顎を鉄板入りの安全靴で一切の躊躇なく蹴り上げ砕き、更に持ち上がった頭部に拳を振り下ろして止めを刺す。最後に、ようやく初撃のダメージから回復した残りの一匹が行動を起す前に頭蓋を踏み砕いて沈黙させた。

戦いはほぼ一瞬で終わり、素手ということもあってそれほど血は撒き散らされず死体も凄惨なものにはならなかったため、ジローに戦闘による被害は傷も汚れも含めて無い。最初の一匹が殺された際に甲高い声を上げた以外は断末魔らしきものもなかったため、目を閉じたままだった涼子もステッペンウルフの死体を見てもまだ血の気が引く程度の症状で済んでいるようだ。

これで加減を間違えて脳漿までブチ撒けていたら流石に嘔吐なり失神なりしていたかもしれない。そんな事を考えつつジローはステッペンウルフの死体三つを纏めて街道の脇に退けると、置いておいた荷物から調理用のナイフとロープ、それからサバイバルキットに含まれていた組み立て式の棒を取り出していく。

街道から離れた場所に適当に放置しておけば同胞かビルドホークが何処からともなくやってきて処理してくれるのだろうが、生憎と懐に余裕がないのでこれらは血抜きなどの処置をしたら都市の方で宿か酒場に卸す予定である。魔獣は一部を除けば問題なく食べられるので、この世界では彼らが食卓に上るのは然程珍しいことでもないのだ。

ジローは組み立てた棒にステッペンウルフの足を縛り付けると、グロッキー気味の涼子に一応一声かけてナイフを手を取った。

「井上。俺はこいつらの処理をしなきゃならないから、見たくないならば早く目を瞑ってる」

「えあ……あつ、はい」

声をかけられた事に一瞬遅れて気がつき、力なく返事をする。涼子は大人しく目を閉じて頂垂れた。犬猫の死体くらいは見たことがあるだろうが、やはり目の前でつい先程まで生きていたそれなりなサイズの生き物が人為的な暴力によって淘汰されるのを肌で感じたシヨックは大きいのだろう。

ジローは既に襲い掛かってくる魔獣ないし魔物を屠ることに躊躇や疑問を抱いてはいないので、そんな涼子の姿を少しばかり懐かしく思い、昔を思い出して苦笑する。

今でこそ簡単にあしらっているステッペンウルフだが、彼奴らは魔力を持っているだけありそれをキチンと活用してくるため、それが一時的な微量の肉体強化のみであってもこの辺りでは十分に注意すべき魔獣である事は間違いない。普通の冒険者なら、中堅どころでも油断無く相対しなければ不意を衝かれて重症を負わされかねない魔獣なのだ。

もつとも、現在のジローにとっては涼子の事を考えて死体の状態を整える程度の手加減が可能な相手ではあつたが。

血がかからないように気を付けながらステッペンウルフの首元を深く切り裂き、血が流れ出す勢いが弱まってから棒を持ち上げると足を縛られたステッペンウルフは頭を下にして浮く形になり、重力に従って流す血の量を増す。十分に流れ出したところで血溜りに浸さないよう地面に置くと今度は持ち歩く間に血が滴り落ちないよう胴体をきつく縛り上げる。

今すぐ食べるわけでも、長期間保存するわけでもないのとおりあえ

ずはこれで完了だ。最後に血溜りに草と土を被せて後始末を終える。

濃い血の臭いを撒き散らすこういう作業は新たな魔獣を寄せ付ける原因にもなるため、本当ならこんないつ襲われるか分からない場所で足手纏いを抱えたまま一人でするものではないのだが、ジローは自分や距離的に身近な人物に害意を持つ存在が近付けば気配を読むこともできるので無警戒というわけでもない。

先程のステッペンウルフにしても、遭遇する前から接近には気付いていた。ただ、涼子に命の遣り取りが身近なものであることを実感させることによって危機感と恐怖を煽り、安易には生きられない“この世界の常識”を手っ取り早く馴染ませるためにあえて気付かぬフリで迎撃したのだ。ついでに、傍目平然と魔獣を殺している風に見せてジローへも恐怖を抱かせることで涼子に早期の自立を促すという些細な目的もあったりする。

「……よし。井上、行くぞ」

「え？ あ、待ってくださいよ！」

ステッペンウルフの死体が三つ並んだ棒を担いでジローが歩き出し、涼子が慌ててそれを追いかけてステッペンウルフの死体に恐々しながらも横に並ぶ。

歩調はジローの方が長時間の歩行に慣れていない涼子に合わせているため昨日からゆっくりとしたものだったが、今は時々早くなった。遅くなったりを不規則に繰り返してとても落ち着きがなかった。やはりさっきの戦闘が影響しているのだろう。緊張からか少し汗をかきながらあちこちに忙しく視線を動かす涼子の様子は、ジローが初めて見たときの涼子に似ていて流石に心配になる。元々体力はあまりないようだが、このままだと旅の疲れより先に精神疲労で倒れるかもしれない。

こうなる責任の一端を担った自覚のあるジローは、どうにか気分転換させようとやや唐突なことを理解しつつ気が紛れそんな話題を振ることにした。

「そういえば、井上はテレビゲームはやったことあるのか？」

「はい？ テレビゲーム、ですか？」

「ああ。シミュレーションやRPG、あと格闘ゲームとか。ジャンルはなんでもいいんだが」

「そうですねえ……」

あまりに脈絡が無かったものの、逆にそのお蔭で気が抜けたのか……或いは自身も早く気分を変えたかったのか、平時に近い声音で問い直す涼子にジローが肯き返すと、涼子は首を傾げつつ元の世界でプレイした覚えのあるゲームを思い返した。

井上 涼子という人間は、一般的とは言わないまでも前科持ちにならない程度の常識と小学生時代に道徳を習ったことを忘れていないくらいには良識を持った普通の少女だ。現代っ子らしく娯楽に触れる機会が多くあるし、人並みの興味も持っている。

なので、両の手で数えられる程度にはテレビゲームの類を自分でも所持していたし友人に借りることもあったが、いざ思い出そうとすると内容はともかくタイトルすら出てこない“やったはず”の作品がいくつもあった。それは涼子自身がオタクと呼ばれる人種ほど執着しているわけでも、やり込もうとするほど夢中になったわけでもなかった為にもいい情報として忘れてしまったからだが、それでも思い出せるだけをなんとか記憶から引っ張り出す。

半ば意地になって記憶を洗っているのは、なるべく直視したくない

現実から逃避するためもあるのだろう。思考の中だけでも元の世界での生活の一端に触れる行為は、今の涼子には安心を得る数少ない手段となっていた。

「きちんとプレイしたのは【スター シャン3】と【ワイルドアイムズ F】、あとは【モンスターハ ター3】くらいだったと思います。【フィナルファンタジー?】や【テイルズ・オブ・アビス】、【ドラゴ クエスト?】はクリアしただけって感じで、【DEVI L M Y CRY】なんかは序盤の敵が倒せなくて投げちゃいましたし」

「へえ、RPGばかりとは意外だな」

挙げられた七つのタイトルの中、実に六つがRPGに分類される。残る一つにしても、DMCはそのアクション性が人気を呼んでいる所からして年頃の女の子が好む内容ではない。少なくとも一般的には。

「自分でも女の子らしくないと思います。でも、剣と魔法ってそんなに嫌いじゃないんですよ?」

現状を受け入れられるかは別として。

口には出されなかつたが、涼子の表情はそう物語っていた。放り出された当初はともかく、すでに数日が経った今では自分が死んで異世界で生き返ったという馬鹿みたいな事象が現実であると理解している。けれど、だからといってそう直ぐに割り切れるものでもない。その辺の意識改革は時間をかける以外はないだろう。それはともかく、また涼子の意識が沈みそうになるのを察してジロ―もさっさと考えていた本題を切り出した。

「ならば、井上の能力でゲームのアイテムとかは創れないのか？  
嫌いじゃないっていうなら出てきたアイテムの能力や見た目もそれなりに覚えてるんだろ。今のところ分かってる条件にも反してないし、俺はやれそうな気がするんだが」

「それってポーションとかを出せるかってことですよ？ 出来たら凄いですけど……そう都合良くできてるものでしょうか？ まあ、やってはみますけど」

とりあえずはどれを創ろうか、などと早速考え始めるあたり涼子も興味はあるらしい。真剣に考えているようだが口元には僅かに笑みが浮かんでいる。

時折、アレがいいかな、コレは判りにくい、など呟きが洩れている様子を見るに思案することを楽しんでいるのは間違いないようだ。というより、涼子の中では無意識の内に“架空の物品”を『創造』可能であることが既に前提となっていた。

「……………うん、決めた」

「お、ようやくか。何にするんだ？」

悩み始めてから十分少々が経過した頃、やっと品定めが終わったらしい涼子が立ち止まり、ジローも数歩先に進んでから足を止めて振り返る。

よもや出来るかどうか不明な事でこれほど悩むとは言い出したジローも思っていなかったのだが、自信ありげな涼子からは「できませんでした」とはならない確たるものを感じて何が出てくるのかと期待をしてしまう。

そしてその期待に応えるように涼子は右手を高く掲げ、熱の入った声で宣言した。

「これから創るものはコレです

戴天神城アースガルズ！！」

名を告げられた瞬間、震動どころか微風一つ起こさずにソレが現れる。

鈍色の巨大な人型。その圧倒的な質量が大地に影を落とし、太陽の光を反射して胴体中央の結晶がキラリと輝く。

「なん……だと……？」

瞬きよりも短い一瞬の出来事は常識どころか非現実的過ぎて思考が追いつかない。あまりの事態にジローはただ、呆然と涼子の創り出した存在を見上げるしかできずにいた。

田舎に属する何の変哲も無い平原に、拠点防衛用に造られたとされる全長18mの機械の巨人が静かに佇んでいるのはとてもシュールだろう。ジローも元ネタのゲームでは当たり前のようにコイツに乗ってあつちこつちに行っていたのだが、この世界でそれをやるのはリスクが高そうだ。

「やったあ！ できましたよじろうさんっ」

「あ、ああ。こいつは予想以上だ」

すごいすごいとアースガルズの足元ではしゃぎ回る涼子を見て、ジローはどうにか正気を取り戻す。予想以上というより予想外と言ったほうが正しいが、そんな些細なことは今はどうでもいい。それよりも、ジローの見立て以上に涼子の能力は危険なようだ。やはり秘匿は念入りに行わなければならないだろう。

そこまで考えて、ジローは今の状態がとても危ないことに思い到った。こんなただっ広い所に巨大な物体が突然現れたら興味を引かないわけがない。いま向かっている都市からも、もしかしたら見えているかもしれないのだ。

「井上、こいつを早く消せ！　こんなところでは誰に見られるか分からんぞ！」

「え？　……あ、そうか！　すみません、すぐに消します」

ジローが慌てて涼子を促し、涼子も自分の迂闊さに気が付いてすぐにジローの指示に従う。涼子が意識下でアースガルズの抹消をイメージすると、最初からそうだったようにアースガルズはその姿を消していた。

その間にもジローは感知神経及び感覚器官に魔力を集中することによって能力を強化し、自分達を確認できる距離に誰かがいなかったかを捜査する。どんなに頑張ってもジローの実力では半径500mほどが限界だが、とりあえずその範囲内には人間の気配は感じられない。これなら、都市から遠見の魔法で視られていた場合を考慮しなければ、ジローたちとアースガルズが無関係と言い張ってもなんとかなるだろう。

「ふう……………とんでもない物が出てきたが、とりあえず“実在しない創作物”も効果範囲内だということは確定か」

「ジローさんにも分かり易い物にしようと思っただんですが………すみません。軽率でした」

「気にするな。話を振ったのは俺だし、注意もしなかったからな」

しょぼくれる涼子の頭を少々乱暴に撫で付けると、ジローは止まっていた足を動かして歩き出す。驚いて頭を押さえていた涼子も、ス Teppenウルフの生気の無い瞳と目が合うと慌ててその横に並んだ。それからは、お互いが知っているゲームや漫画を確認したり、その内容を語り合いながら道を進んでいく。

これはジローが涼子が創り出すことのできる物を把握しつつ、この世界に存在すると危なそうな物品を指摘するためののだが、二人とも思いの外楽しんで話していた。

涼子は現実逃避的な意味合いが強いが、ジローは前世を懐かしんでいる節がある。割り切ったとはいえ、どうにも郷愁は拭えないらしい。

もっとも、忘れられないのは娯楽だけかもしれないが。

この世界には電気も普及していないのだから家電製品など当たり前だが存在しないので、テレビゲームもない。高価ではあるものの紙は普及しているから絵本や小説くらいはあるのだが、紙を用いている分値が張るためジローのような単なる農民には縁の無いものである。

そういつた暇を潰すための物が殆ど無いため、一時期はチェスや将棋を自作したり、皮で作ったボールを持って村の子供にサッカーを広めてみたりと色々やっていたこともあった。

サッカーは今でも村の子供たちには人気だし、チェスなどは村長を初め一部老人や大人に受けたため酒場にはいくつかの盤が駒とセツトで置いてある。

両親が亡くなってからはそんな暇もなく農作業や狩りに追われていたが、畑が消し飛んだ現在は無職の身。早く仕事が見つければ、また何かする余暇ができるかもしれない。

ジローはそんな事を考えながら、街までの道程を涼子との雑談で過ごすのだった。

「あ、そういえばゲーム自体も創れるんでしょうか。一緒に出来るヒトが身近にいなかったんで、モンハはいつもソロプレイだったんですよね」

「暇が出来たら是非創ってくれ、是非に」

涼子を一人立ちさせる計画が揺らいだのは、仕方ないことであると思いたい。

その後は特に何があることもなく、日が暮れるより多少早く目的地に辿り着いた。

「遠目に見たときも思いましたけど、大きな街ですね」

「まあ、城塞都市ってくらいだからな」

涼子が物珍しげに見上げるのは、二十メートルはあるだろう高く築かれた城壁だ。

ジローたちがやってきたのは“難攻不落”と称される城塞都市グラニエ。その名の通り周囲を堀や土塁、城壁などに囲まれた都市である。

名前も外観も物々しい街だが、実際にこの城壁が活躍したのは百年以上も昔の事だ。大昔は日常であったという魔物の襲撃は散発的になり他国との戦争はなく、隣国とは同盟も結んでいる今となっては住民にとっても“難攻不落”はハリボテでしかない。

「さて、今日のところはまず宿をとらないとな。そろそろ日も暮れる」

「はい」

門で簡易な検査を受け無事に都市内に入ると、茜色に染まる街並みを流し見ながら二人は宿へと歩を進めた。

何度も農作物を卸しに来ているジローがほぼ顔パス状態だったおかげで一緒にいた涼子も適当な言い訳で通してもらえたのは行幸であったが、顔見知りの門番の話によるとどうやら宿を取れない可能性があるらしい。

なんでも、一月ほど前に開店した飲食店が大層な人気を出して旅行客が大勢来ているのだとか。

街に辿り着いたのに野宿というのは流石に避けたいのでジローもやや急ぎ足で向かったのだが……

「悪いね、うちはもう一杯なんだよ」

「すまんがこの宿の部屋は既に満室だ。他を当たってくれ」

「申し訳ございませんが、当ホテルは来月を含めて予約で埋まっております……」

「ここはゼネレイド辺境伯が貸切で御宿泊されている。田舎者は大人しく山で野宿でもしているんだな」

などなど、最後のはともかくジローが知る全ての宿が利用不可となっていた。交渉しようにも皆がさっさと追い返してくるものだからそれもできず、最後に到っては辺境伯の私兵に門前払いである。ちなみに、確かにすぐ近くに山はあるが、それはグラニエを“難攻不落”と云わしめていた要素の一つ。即ち天然の要害であり、グラニエを挟む形で扇状に幾つも存在しているそれらはあまり人に優しくない。野宿などしようものなら翌日生きて出られるかも分かったものではない場所だった。

「まいったな、宿はこれで全滅だぞ」

「ど、どうしましょう?」

不安なのだろう。ジローを見上げている涼子が、その服の裾を掴んでいるのは意識してのものではないと分かる。

なるべく楽しげな会話で「異世界に生きる異常事態」という認識を薄れさせ、この世界で生きることを自然と受け入れられる土壌を作っていたこうと画策していたジローとしては、何とも間が悪いと……そう思うしかない。

こういう事態が続いてしまうとネガティブな感情に囚われてしまい、非常に宜しくない結果までついてくるようになってしまう。そうなのといよいよもって頼れる相手、自分を助けてくれる人物に依存するようになっていく。

この場合は涼子にとってのジローがそうであろうし、かといってジローはあまり厳しく接したり突き放したりという行動にはでられない。そうすることで事態が好転するならともかく、もっとのつぴきならない状況になったりしたら目も当てられないだろう。

最低限自立できるまでは面倒を見ると約束した以上はジローも放り出す真似はしたくないので、ここは早急に対処して次の機会を窺う

べきと判断した。

「……しかたない。あんまり迷惑はかけたくなかったんだが、こうなったら知り合いの家に泊めてもらおう」

「この街の門番さんみたいにお知り合いがいるんですか？」

「ああ。小さな酒場をやってるテオドアって爺さんだ」

本名をテオドアⅡヘオⅡフロイラン？世という。元は貴族だったが、花売りだった奥さんと一緒になるために駆け落ちしたという過去を持つ小粋な老人だ。

この城塞都市で四十年以上も酒場を営んでおり、数年前に流行り病で奥さんを亡くして以来は一人で酒場を切り盛りしている。

ジローの両親とも知り合いで、両親が亡くなった時はジロー自身も色々とお世話になった。

「城門から見た大通りの中間くらいから右に入って三つ向こうの路地の隅にあつたはずだから……うん。ちょうどこの辺だな」

すぐ左に見える路地を曲がってみれば、目の前には大きくも小さくもない見知った店構え。貴族という立場を捨て、一市民として生きる と決めたテオドアのもう一つの始まりの場所。それがこの酒場【リ・スタート】だ。

ジローは以前にそう聞いて、なんとなくこの店が好きになった。名前の響きに自分の境遇を重ねたからだろうか。それはボンヤリと掲げられた看板を見ている涼子も同じかもしれない。

「ほら、いくぞ井上」

「あ、はい」

ジローは涼子を促して両開きの戸を開ける。と、そこで違和感を感じた。

昔から客が入っても静かな雰囲気を感じさせる店ではあったが、中はまだ営業を開始していないかのように閑散としており店主であるテオドアの姿もない。

埃が積もったりなどはしていないので掃除はされているのだろうが、まるで開店閉業中とも言わんばかりの様子だ。

店内に踏み入り、そういえばと扉を振り返ればカウベルが付いていないことに気付く。不安が首を擡げると、背後から声かけられたのはほぼ同時だった。

「おー、客か？ 悪いけどいま店はやってないんだ」

「　　っ!？」

ジローは咄嗟に涼子の前に出て、声を発した人物に向き合う。

心の中で警鐘が鳴り響き、彼我の実力差を必死に伝えてくるがこの距離では逃げられないことも同時に理解する。おそらく勝つにはジローの能力を使うしかない、相對しているのはそういう手合いだと嫌でも分かった。

「おいおい、随分と警戒してくれな。そんなに驚いたか？」

肩口で揃えた薄い金髪に白い肌、そして血みたいに赤い瞳。中世的な声音と整いすぎるくらいにパーツが整った顔のせいで性別は曖昧。身長は160前後で体軀は華奢。着ている服は何の変哲もない白いセーターと紺のスラックス。

目で確認できるものだけでは大層な美形としか思えないが、神経を

尖らせることで視えてくるモノはかなりヤバイ。まず、気配が読めない。いや、相手に集中している今なら気配を感じることはできているが、それでも人間を前にしているような感覚はなかった。感じられる気配はとて歪で集中しなければ其処に在ることも見逃しそうなほど生気が欠如している。魔力にいたっては感知できないどころか自然に存在しすぎていて質も量も測りようがなかった。

「何なんだ、お前。テオドアの爺さんはどうした？」

できるだけ声を平坦にしてジローが問いかける。敵意を持ってはいけない。まだ敵と決まったわけではないし、そうでないとしても初対面でこの対応は失礼極まりないだろう。それでも警戒せずにはいられない存在に、ジローは今日はじめて会った。

一方、問いかけられた人物は少し戸惑った様子を見せたが、なにか納得できることに心当たりでもあったのかすぐに落ち着きを取り戻す。

「……………どうやら、アンタは“わかる”奴らしいな。あの爺さんの知り合いでもあるみたいだし。まあ座ってくれ、茶でも飲みながら話をしよう」

赤い目を細めて笑顔を作ると、尋常ならざる存在はカウンターの奥に入っていった。

「まずは自己紹介をしよう、俺は祐輝・川野。テオドア爺さんには二週間くらい前から世話になってて、この土地もつい先日譲ってもらったんだ」

「え……に、日本人？」

テーブルの一つに腰を落ち着けて、先に互いの身元をハッキリさせようとしたのか名乗った相手の名前が予想外だったために、涼子が思わずといった様子で驚きを露にする。

相手 祐輝も“日本人”という単語に反応してかキョトンとした顔で涼子を見ていた。

確かにこの世界の人間で完全な和名持ちはいない。それに発音などからも咄嗟にそう思うのは仕方がないことだろう。それでも敵かどうかも定かでない者を前に自分の有する情報を徒に与える行為は慎むべきだ。

もっとも、今回に限っては話を円滑にする良い材料になったようだが。

「そう反応するってことは、アンタもご同輩か」

「あ、はい。涼子・井上っていいます」

「そついや確かに顔立ちや色も日本人そのものだよな。じゃ、そつちの人も？」

改めてまじまじと涼子を見詰めて一人納得した祐輝は、ジローの方にも視線を向ける。

数瞬、どう答えるか迷ったものの、ジローはとりあえず頷いておいた。詳しく話す必要はないが、ここで嘘を言う必要もなかった。

「ジークロード・ニアウッドという。ジローと呼んでくれればいい」

「ジロー、ね……オーケー。それじゃ俺の事情を掻い摘んで説明しようか」

そうして祐輝が語ったのは、涼子とさして変わらない。

元の世界で死んでしまい、神と名乗る何某かに能力を貰って転生し、気が付いたらこの街の近くの森にいた。そこでテオドアに出会い、以降世話になっていたのだと。

最も、テオドア本人はつい先日王都へ行ってしまったのだそうだが。

「爺さんは何故王都に？」

「なんでも孫がやってる宿が軌道に乗ったらしくてな、そこで一緒に暮らそうって連絡がきたらしい。随分急いだから他にも何かしらあったのかもしれないけどさ」

ジローの問いに答えて自分の茶を飲み干すと、祐輝は立ち上がった。バーカウンターの後ろに回る。

そこで屈みこむと、一枚の紙を手にして戻ってきた。

「これ、アンタへの手紙。ジロー坊ってアンタだろ？」

「拝見する」

差し出された手紙を受け取り、早速中身に目を通す。

文章の最初にまず直接伝えられなかったことへの謝罪があり、次いで祐輝が言ったような理由でこの酒場を離れること、森で拾った祐輝のこと、その祐輝に店を譲渡したからできれば助けてやって欲しいといった内容だった。最後に、冬になったら王都に遊びに来いと書かれて締めくくられている。

一つ息を吐いて手紙を返すと、ジローは祐輝を見据えた。

「だいたい分かった。こちらも丁度困っていたところだ、お互いに協力しあうということでもいいのか？」

「……たく、あの爺さんも人が良いな。ああ、助けてくれるってんなら大歓迎だ。残ったはいいけど俺じゃ適正な物価もわかんねえから酒場続けることもできないくてさ」

広げられた手紙を見やった祐輝は苦笑しながらジローの提案を受け入れる。彼にとって恩人であるテオドアの気遣いをわざわざ無碍にする理由はない。

二週間だけとはいえ見知らぬ怪しい奴を世話してくれるくらい面倒見の良い老人だったが、それでも二週間でこの世界の常識を覚えきれぬものではなかった。それだけに、すでにこの世界に馴染んでいるように見えるジローの助けは祐輝にとって非常に有難かったのだ。ジローにとっても、この街で暮らしていくうえで安く済む拠点が入るのは都合がいい。

酒の取り扱いはともかく軽食くらいならできると自負しているので、店を改装してしまえば仕事を探す手間も省ける。

「井上、とりあえずの宿はなんとかあったぞ」

「え？ あ、はあ」

どうにも話についていけないようだが、今は構わなかった。

ジローのように似通っているだけではない、同じ境遇の人間がいるというのは井上にとってもプラスであるとジローは考える。少なくとも、あのセフィロスとは違って関わることさえ避けたがることはないだろう。それは話してみたジローもそうである。

とりあえず野宿を免れて余裕ができたので、ジローは涼子も話に加われるように会話を雑談へシフトすることにした。長短は別にして、これから付き合っていく祐輝と親交を深めておくことは大事だろう。

「ところで、川野はどんな能力を買ったんだ？」

「あ、俺のことは祐輝でいい。んで能力だっけ？ 俺が買ったのは月 ってゲームの真祖の能力だな。アンタ達は？」

「えっと、わたしはモノを創る能力ですが……真祖ってというのは？」

「俺のは変身能力みたいなものだな。祐輝と違って元ネタなんてないが」

なんでもないように能力を明かし合う。ジロー以外が気にしているかは分からないが、これは手っ取り早く信頼を築くためにも必要なことだ。秘密を共有すれば仲間意識が生まれ、そうすればある程度は助け合ってくれる。

涼子の能力は本来なら隠しておくべきものだが、同じ境遇である以上は何らかの能力を得ていると考えるのは道理である。下手に隠し立てするよりは曖昧なものとして認識してもらったほうがむしろいい

いのだ。

祐輝の様子を見て、創り出せる範囲を誤魔化したまま口止めできれば暫くは問題ないと判断したのもある。だから涼子が自分の能力を告げてもジローは止めなかった。

「ジローは 姫知ってんのか。井上さんは……そういえばキミ何歳？」

「はい？ 16ですけど……」

「なら流石に知らないか。まあ簡単に言っしまえば吸血鬼だよ、俺は吸血衝動消してもらってるけど」

「きゅ、吸血鬼ですか!？」

「そんなに怖がらなくても大丈夫だって。俺は別に吸う必要ないし」

「それでも普通は怖がるものだろう」

ジローは今後の算段を立てながら二人の同郷者と他愛ない言葉を交わす。涼子や祐輝も、内心は別にして今この時の会話を楽しんでいるようだ。

これからどうなるにせよ、この日に三人が友人になれたのは間違いないだろう。

結局、和気藹々とした雑談は夜が更けるまで続いたのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7124m/>

---

死から始まるニューデイズ

2011年10月13日16時50分発行